

付けを新村に回すことなどが間々おこなわれ、志摩村は合併成立後、ただちに財政破綻を来した。これを受けて、志摩村は昭和三十一年に地方財政再建特別措置法にもとづく申請をおこなった。財政再建を遂げようとするが、この申請に当たって選挙区制を解消し、議員定数を二四人から一六人に八人削減している。また、各種団体機関、消防団、村農業委員会の統合、支所の統合など、旧村の枠組みは、制度的には大きく解体の方向に向かっていたのである。

町制の施行

この合併から十年後の昭和四十年四月一日、志摩村は町制を施行し、志摩町に変わっている。記念式典は、鎌田五郎町長が入院中であつたために五月一日に志摩中学校でおこなわれ、町から功労者に特別感謝状を呈している。この式典の前日の四月三十日に鎌田町長は、助役、総務課長、町議会正副議長、常任委員長の七人を伴って福岡市庁で阿部福岡市長と会談、福岡市と志摩町との合併を申し入れていた。

二 志摩村連合青年団と公明選挙運動

志摩村連合青年団

このころ、志摩村で起こった特筆すべき政治的行動とは、志摩村の連合青年団による公明選挙運動である。公明選挙とは供応、買収などの選挙違反の撲滅ばかりか、個人の良識にもとづいた自由な政治意思表明の場として、選挙に参加できるようにすることが含まれている。同青年団は公明選挙特集をした機関紙三〇〇〇部、ポスター一

五〇枚を作成したり、候補者に公開質問状を出したり、幹部がトラックに同乗して啓発行動をおこなっている。

公明選挙は私 「糸島新聞」昭和三十年四月九日付には、志摩の心の中に 摩村青年団の女性団員が「公明選挙は私達の心の中に」という文章の中で次のような大意を述べている。

① 自分の父親は、部落長を始め部落の幹部の面々から「部落全員のお願いだから」と懇請されて、村議会議員選挙に立候補したが、その日以来、自分たち家族は田植え仕事も「うっちゃって選挙事務所の前」に追われていたが、ある人から「もっと金を使わんとつまらんぜ」と言われ、身が凍るような思いと激しい憤りを感じた。

② 選挙は落選したが、毎日選挙事務所に来ていた人物が「金の使い方が少ない」「酒を飲ませない」といって、反対派の運動をしていたことを選挙後に知った。

③ 金の力や権力にものを言わせて立候補して当選していく人が公明正大な社会を作り出すことは疑問である。このような現状は、当選していく人やその取り巻きの人びとの責任もあるが、選挙権を行使する自分たちの責任であると考えられる。自分たちは、よく考えて「正しい票」を投じるべきである。

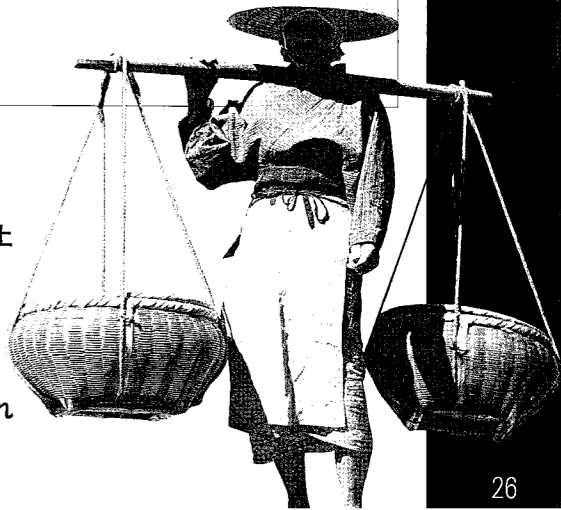
村議会議員 このような公明選挙運動が若い人びとによって選挙模様 展開されていたのであるが、その一方で相変わらず村議会議員選挙模様が存在している。「公明選挙は私達の心の中に」を掲載した同日の『糸島新聞』には、部落間の協定や候補者間の調整がおこなわれており、それでも立候補期限

※第八章・第四節・二 志摩村連合青年団と公明選挙運動

現代編 全231頁

敗戦後の糸島地域が現在までどのような経過をたどってきたか、政治面、産業面、人びとの生活面について掲載しています。志摩村の成立過程や怡土村の町村合併研究委員会による一郡一村構想、周船寺・元岡・北崎の各村の状況など興味深いものがあります。最終章には志摩町から糸島市へと題し、過去幾度となく起こってきた合併運動、福岡市との関連、九州大学の移転などの経過も掲載しています。

現代編には、特に人物紹介として志摩地域出身で各方面の発展に貢献された15名を紹介しています。



の前日にもかかわらず、立候補者が決定していないという状況が報じられており、相変わらず村議会議員選挙において部落推薦がまだ大きな比重を占めていたことを示している。このような選挙に関する対照的な姿勢は、自由な村民の政治的意思にもとづく代議制の場としての村議会と、村落共同体同士の利害調整を、村落有力者がおこなう場としての村議会、という村議会の相異なる在り方に照応していたのである。なお、公明選挙運動は、地方事務郡選管委により県表彰候補として推薦されている。

第五節 一郡一村構想

一 怡土村町村合併研究委員会と一郡一村構想

地方事務所の新四ブロック案中、北部ブロック案は、北崎村に拒否されながらも残り四カ村が合併、志摩村を生み出したのであるが、この四ブロック案とともに、糸島郡の町村合併案として検討対象となったものに、一郡一村案がある。同案の発源地は、東部ブロックに属するとされた怡土村である。同じ東部ブロックに数えられた元岡村、周船寺村は、福岡

人物紹介①

坂木 小波 (さかき こなみ)



明治四十三年(一九一〇)生まれ、寺山。小学校教諭を退職後、昭和三十七年、志摩村連合婦人会初代会長として就任。戦後の混乱期を脱却し、神武景気を迎えた当時、やっと農村にも新しい文化が普及し始めた。いわゆる、三種の神器としてはやされたテレビ、冷蔵庫、洗濯機といった電化による生活改善が迫られた。そうした社会の流れの中で婦人会活動も活発となり、その内容も複雑多様化していた。氏は、これを機に一村一体の意識を結集し、芥屋・可也・小富

士・桜井・野北の各婦人会を、同一方針の下に連合婦人会の結成に向けて尽力した。同時に、新しい時代の生活改善に向けて、内容の充実を目ざして連合婦人会活動の推進に努力した。

当時は、「戦後強くなったのは婦人と靴下」といった世評の中で、氏はまだまだ婦人は強くないと主張し、農漁村に根強く残る男尊女卑の封建色を脱却すべく、「婦人会自体の高まり」と「学習の強化」を推進した。

具体的には、家庭の民主化、青少年問題、経済生活での生活設計、保健衛生など、地域の実態から学習していくべきだと訴え、大きな成果を取めた。その後も、志摩町の社会教育の一環として婦人会活動の基盤作りに大きく貢献した。

現代編 執筆者紹介

- 榎木 武洋 (元小学校校長)
鳥巢 京一 (福岡市博物館学芸員)
吉田 昌彦 (九州大学大学院比較社会文化研究院教授)

